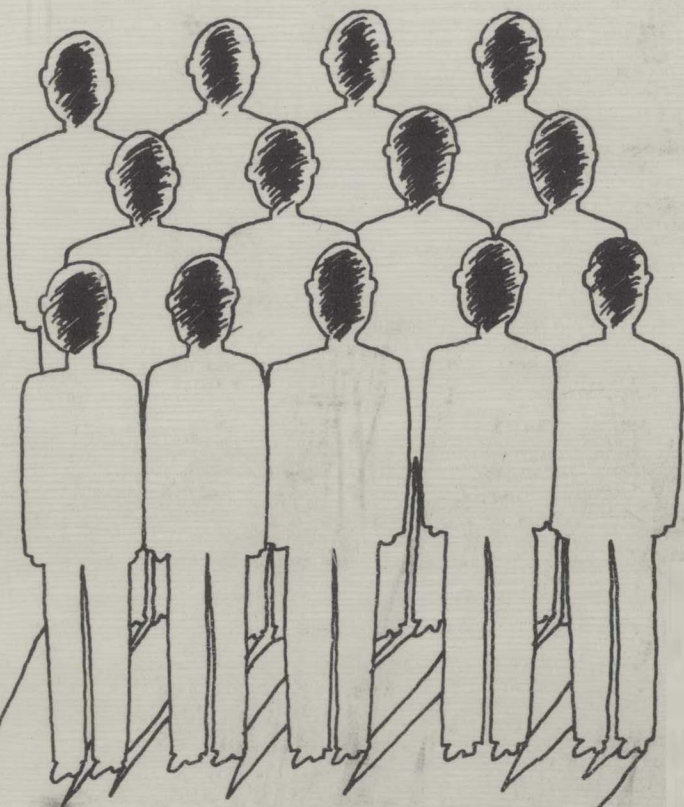


公共考査機構

かんべ むさし



公共考査機構

かんべ むさし



公共考査機構

昭和五十四年七月十日 第一刷

著者紹介

昭和23年金沢市生れ。関西学院大学社会学部卒業後、広告代理店にコピー・ライター等として勤務。昭和50年「SFマガジン」に発表された処女作「決戦・日本シリーズ」の「背で泣いてる」で一躍注目を集め、同年末作家として独立した。ユニークな発想をユーモラスかつシニカルなタッチでまともあげる手腕にすぐれ、ナンセンスSFの系譜を継ぐ作家としてSF界に確固たる地歩を占めている。著書に『宇宙の坊っちゃん』『水素製造法』『社長室直屬遊撃課』『サイコロ特攻隊』『ボトラッチ戦史』『建元住宅温泉峡』『笑撃空母アルバトロス』などがある。

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 かんべ むさし

発行者 徳間 康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(43)六二三一(番代表)
振替東京四一四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします)

編集担当 久保寺 進

目次

a そして b	3	
第一章	疑惑	9
第二章	策謀	40
第三章	宣言	83
第四章	包囲	124
第五章	岐路	171
第六章	選択	215
あとがき		264

装帧 山下勇三

a
そして b

4 || a

「行ってくるわ、あなた」

加代子が靴を履き、ドアのノブに手をかけて言った。

「ああ、気をつけてな」

パジャマ姿のままキッチンテーブルにむかっていた日高はこたえ、読みかけの朝刊の求人欄を指さした。

「僕も、あと三十分もすれば出かけるよ」

「いいところがあるの?」

ノブから手を離し、コートの袖をちょっとまくって腕時計を見ながら加代子が聞く。

「うん、倉庫の出荷検品係なんだけどな、長期アルバイトも可、年齢経験不問なんだ。こういうところならば、いちいち……」

「そうね」

ほっと息をついて彼女はつぶやいた。

「いちいち、調べたり問い合わせたりはしないでしょうね」

「今日はここへ行ってみて、あさっては職安の出頭日だ。まあ、もうそろそろ何とかかなると思うよ」
日高は加代子を安心させるように、あるいは自分自身を納得させようとするように、同じ言葉を繰り返した。

「もう、そろそろ、何とかなるよ」

「時間がない、行ってくるわ」

重くなりかけた雰囲気を感じたのか、加代子はわざと陽気な声をだした。

「今日からバーゲンなの。店が聞く前からお客さん達並んでるだろうから、遅刻すると大変なのよね」
ドアをあけ、ふりむいて言った。

「出るとき、ストーブちゃんと消すのよ」

「ああ」

日高はこたえ、そして言った。

「すまん、いろいろと」

「何を言ってるの」

加代子は一瞬泣きそうな顔になり、ついで少し乱暴な口調をつくって言った。

「いまさらゴメンなんて言ったら、今度こそ私、本気で怒っちゃうわよ」

「……………」

強くなったな。日高は思い、立ちあがってうなずいた。

「行っといで、気をつけて」

「あなたもね」

加代子が外に出て、冷たい風がさっと入ってきたのち、ドアが閉まった。

「一月も、もう終りだな」

日高はつぶやき、奥の六畳へと入った。

「大変な正月だった」

着換えをしながら考えた。

「しかし、こんなことがいつまでも続くはずがない。今年の年末には、来年の正月には」

ネクタイを結び、上着を着て鏡を見た。

「何とか元に戻っているはずだよな」

自分自身に語りかけ、襟元のボタン穴をさわってニヤリと笑った。

「まあ、ここにバッジはつかないかもしれないが……」

コートを着てキッチンに戻り、石油ストーブを消した。

「辻もがんばってるんだ」

彼はテーブルの上の朝刊を取り、折り畳みながらつぶやいた。

「俺だって、負けてたまるか」

そして玄関へ行つて靴を履き、もう一度2LDKの室内を見まわしてから、ドアをあけて外に出た。

ロックを確かめて顔をあげる。

吹きぬけになっている高層住宅七階の廊下は、冷たい風も自由に通り抜けていく。

「負けてたまるか」

日高はもう一度思い、その風のなかを、胸を張ってエレベーターへと歩きだした。

「出演」してから約一カ月後の、ある朝のことである――

「行ってくるよ」

日高は靴を履き、二日酔いでふらつく身体を下駄箱にのぼした左手でささえて言った。

「行ってらっしゃい」

キッチンのテーブルにつき、小さな声で加代子がこたえる。

「……………」

ノブに右手をかけ、日高はどろりとした眼でその姿を見て、しばらくじっとしていた。

「御免なさい……………」

気づいて加代子がつぶやいた。

「……………何がだ」

「何がつて……………」

加代子は顔を伏せ、唇を噛んだ。

「もういい、何度も言うな」

ノブから手を離し、日高は上り口にゆっくりと腰をおろした。頭をかかえ、うめくように言った。

「水をくれ……………」

「大丈夫？」

加代子が立ちあがり、あわてたようにコップに水を入れて持ってきた。

「ねえ、本当に大丈夫？ 何も食べないのが、かえって悪いんじゃないの」

日高は無言のまま水をごくぐくと飲み、ふうっと大きなため息をついてつぶやいた。

「酒臭いか。俺は、酒臭いか？」

「……………」

空のコップを持ったまま加代子はこたえない。しゃがみこんで、日高のコートを着た背中をさすり始めた。

「臭いだろ。毎晩毎晩、飲みつづけているんだからな」

「……………」

「仕事は適当に片づけて、あとは飲んでばかりいるんだものな」

「そんなこと言わないで」

加代子が涙声を出し、日高はふんと鼻を鳴らした。

「俺はいいかげんな男だ。まったく、自分であきれて笑いたくなるほど、いいかげんな男だ。なあ、そうだろう。そう思うだろう」

「御免なさい」

さする手を止め、加代子は泣きだして言った。

「私があんなこと言わなければ。でも、あなたがこんなになってしまふなんて思いもしなかったから。私、その場さえやり過ぎせば、また元のあなたに戻ってくれると思って」

「もういいと言っただろう」

日高はどなり、よろよろと立ちあがった。

「ああしようと思ったのは俺だ。俺が決めて、俺がいまその報いを受けている。当然のことだ。別に不思議はない」

ドアのノブをつかみ、それをまわして彼は言った。

「行ってくる。極東ハウジング営業促進部の普及課へ、いまから出社だ」

冷たい風が吹く高層住宅七階の吹きぬけ廊下に出、日高はニッと笑った。

「小山君達と仕事をしてきます」

「……………」

涙のいっぱいたまった眼で見つめる加代子にちょっと手をあげてみせ、ドアを閉めた。

「仕事をしてきます……………」

つぶやいて、のろのろと歩きだした。

「同僚の小山君達と、仕事をしてきます……………」

風のなかを首をすくめ、背をまるめて日高は歩き、エレベーターの前に立った。

「ふん」

ボタンを押して壁にもたれなかった。

「辻さん、あんな年賀状もくれなかったし、いつ電話しても切ってしまうんだね……………」

コートの袖で目尻をおさえ、日高はもう一度、ふうっと大きなため息をついた。

「ねえ、辻さん。あんな、俺のことなんか、もう忘れようとしてるのかい……………」

ランプが点滅し、ドアが開いた。

「それはそれで、仕方がないけどね」

握り拳で両眼をこすり、日高はエレベーターに乗った。側壁に上体をあずけ、同じことを繰り返してつぶやいた。

「それはそれで……………仕方がないけどね……………」

彼一人しか乗っていない降下するエレベーターのなかで、日高は叫んでいた。

「ええいくそつ、今日も仕事か！」

「出演」してから約一カ月後の、ある朝のことである――

第一章 疑惑

1

取引先でのうちあわせを終え、自分の社が入っている都心のビルに戻ると、エレベーター・ホール正面の大幅計が、十二時半少し過ぎを示していた。

「飯を食うか」

日高は思い、エレベーターには乗らず、クラフトの事務封筒を持ったまま、右手案内カウンター横の階段を地下二階まで降りた。

喫茶店・書店・文具店などが両側に並ぶ天井の高い通路を歩き、左側奥の食堂に入った。

多分数千人はいるだろうと思われるこのオフィス・ビル内のサラリーマンとOL、そして周辺ビルで働くさらに何千人かの男女を対象客とした、セルフサービス形式の巨大な食堂である。広さは地下二階平面積の四分の一に及び、入った右手にチケット売場、以下同じ壁面に、トレイと食器を用意する棚、飯と味噌汁、各種の副食物を受けとるカウンターなどが奥にむかつてつづいている。

それ以外のスペースは、すべて等間隔に固定された長いテーブルと椅子の列なのである。

いまはちょうどラッシュ時なのでそのほとんどがうまっており、むかいあわせ二列、または背中あ

わせ二列になった男や女達が、さらに全体で十数列を作って食事をとっている。

食器の触れあう音や話し声が連合して雑音となり、ワーンと天井に反響している。

ときどき鋭い音が響くのは、食べ終えた者がトレイや食器を、要所に設けられた返却棚に乱暴に置くからだ。

「……………」

チケット売場の横に立ってその様子を見つめ、受けとりカウンターの人の列、チケット購入に並ぶ人数などを観察して、日高は「大丈夫」と判断し、自分も購入客の列についた。

「まあ、待たずに坐れるだろう」

思いながら壁のメニュー・パネルを見あげ、Bランチにしようと思った。

前から一人ずつ順に、停滞することなくチケットが売られ、列が進んでいく。

「養鶏場の逆だな」

ひと足ずつ前進して、日高は思った。

「養鶏場では、じっとしている前を餌箱がゆっくり通過していく。こっちは、餌がじっとしていて、俺達が流れていくんだからな」

まったくの流れ作業によって、昼食は実質十数分間でとり終えることができるのだった。

いまはまだいいが、ピーク時にぶつかると、その十数分間のために倍以上の時間を待たなければならぬこともある。

「俺達も鶏だな。それも世話のやけない、実に従順な」

日高は苦笑し、チケットを買って、期待されているとおりの行動に移った。アルマイトのトレイを取り、ナイフとフォークをその隅に置いて主食カウンターへ移る。チケットを示して西洋皿に盛られたライスを受けとり、副食カウンターで魚フライとマカロニ・サラダの盛り合わせを貰ってチケット

を渡す。

それから隅の飲料水コーナーでプラスチックのコップに水を入れ、こぼさないようにトレイを水平に持ってテーブルへと移るのである。それがこの食堂において期待され要求される秩序、というものののだ。

「さて、どこが空いてるかな」

事務封筒を脇にはさみ、テーブルに近づいてあたりを見まわしたとき、日高は少し離れたところで同僚の小山が和定食を食べているのに気がついた。そしてそのむかいに坐っていたOLは、ちょうど食べ終えたところらしく、トレイを持って立ちあがりかけている。

「あそこへ行こうか」

一瞬そう考えたが、彼はすぐ思いなおした。

「昼飯くらい、一人で食べよう」

席を立ったOLと同じ列のもう少しむこうでも、男が一人立ちあがっている。

「うん、あそこでしょう」

そろそろと歩きだし、背中の中のをすりぬけていく。そのとき声がかかった。

「日高、ここ空いてるぞ」

たまたま顔をあげた小山が、箸の先でむかいの席を示しているのだった。

「ああ、うん」

日高は瞬間で笑顔をつくり、小山の前にトレイを置いた。腰をおろし、事務封筒を膝の上に置く。

「そう思って、来たんだ」

言ってから、自分で自分の言葉が不愉快に思えて、彼は話題を飛躍させた。

「ここに坐ってた奴、ちょっとした女だったな」

「ああ」

小山はニヤッと笑い、焼魚をほぐす手を止めて日高を見た。

「三階の旅行代理店の女だ。今年入ったばかりだから、まだ社会人半年目だな」

「詳しいな」

ナイフとフォークを取りながら言うと、井飯をかきこんでこたえた。

「俺は独身だからな、あらゆる所に網を張ってチャンスを待つ。おまえにつづくつもりなんだ、社内ならぬビル内結婚」

「ふむ」

あいまいに笑って、日高は食べ始めた。

「嫁さんは元気か」

「まあね」

「もうそろそろ落着いただろう」

「ああ」

小山の問いにきわめて簡単に、しかしぶっきら棒にはならないようにこたえて、食べつづけた。しばらくは互いに手と口だけが動く。

「一度、招待をしてくれよ」

食べ終えた小山が、茶を飲みながら言った。

「えっ、ああ」

日高は顔をあげ、相手が半分以上本気で言っていることに気づいて、つけくわえた。

「そのうちに招待するよ」

「そのうちなんて言わずに、新婚のうちに呼んでくれ。加代ちゃんの新妻姿、ぜひとも見たいからな」

「うん」

食事に戻った日高をじっと見つめ、小山は湯呑み茶碗を置いて言った。

「別に、何かもめてるわけでもないんだろ」

「えっ」

ナイフの動きを止め、日高は小山の顔をみた。ニヤニヤ笑いをうかべ、そのくせ探るような眼で彼を見つめつづけている。

「もめてるって、どうして？」

少しオーバーに問い返すと、ふっとその視線をそらして言った。

「いや、会社の誰と呼んでないらしいからな。新婚二カ月で早くももめてるんじゃないかって噂もあるからよ」

「関係ないよ」

日高は笑顔をつくってこたえた。

「しばらくバタバタしてたし、嫁さんの友達とか僕の学生時代の仲間なんかを押しかけてくるから、まだ機会がないんだよ。別に何もトラブルは発生してないぜ」

「ふん、そうか」

小山は拍子ぬけたようにうなずき、それから表情を突然真剣なものにしてささやいた。

「トラブルで思い出したけど、例の女の一件、嫁さんには喋ってないだろうな」

「……………」

口に入れたけたフライを皿に戻し、日高がえっという顔を見ると、小山はチラッチラッと周囲を見て、顔をつきだしてきた。

「ほら、嫁さんと一緒に会社にいたあの女の一件だよ。喋ってないだろうな、おい」

「ああ、あれか」

日高は少し不快気にこたえた。

「喋ってないよ、安心しろ」

「そうか、すまん」

小山はほっとしたように顔を引き、ニタニタと笑った。整った顔だが、かえっていやらしく見える。

「まあ、別に何ということもないけどな、あの時点では両性の合意ってやつが成立してたんだから。刑事責任なんて無いんだもんな」

「……………」

他人事のように言ってから、しかしやはり心配ではあるのだろう、もう一度顔を近づけてきた。

「だけと言わんでくれよ。仲間を売るような真似はしないでくれよ」

仲間か——と日高は思った。俺がおまえの仲間とはね。女を甘いベタベタの言葉で騙して、頂くものは頂いて、おまけに競馬競輪競艇の資金を何かと理由をつけてふんだくって、それで後は知らん顔で放ったらかしておく、そんなおまえが俺を仲間と呼ぶとはね——

「何をそんなにびくついている」

理由はわかっているのだが、本人の口から言わせてやりたくなくて、日高は聞いた。

「その女はとうに会社を辞めて田舎に帰ったんだろう。しかも、二年以上も前の話だろう。僕は別に誰に言ったりもしないけど、何をそんなに」

「いや、まあ、何かとな」

途端に小山はどぎまぎしだし、わざとらしく明るい声をあげた。立ちあがろうとしている。「番組が恐いのか」